

## タイ語研究最前線



海外交流

村上忠良\*

From the Forefront of Thai Studies

Key Words : Thai language, Buddhism, Scripture

## 1. タイの仏教

タイ国は仏教徒が人口(6400万人)の約95%を占め、僧侶と見習い僧<sup>1</sup>を合わせた出家者32万人と3万5千の寺院を有する「仏教国」として知られている。毎朝、街中を托鉢して歩く黄色い袈裟を着た僧侶たちの姿や、きらびやかな寺院建築、仏教の祭日に多くの人々が寺院に集い寄進を行う様はまさにタイらしい風景である。このようなタイの仏教の姿は、現代日本の仏教の姿とは大きく異なっているように見える。筆者は、大阪大学の外国語学部でタイ語とタイ文化の授業を担当しているが、学生から「タイの仏教は日本の仏教とどのように違いますか?」とよく聞かれる。とりあえずの答えとしては次のようになる。

現在の仏教は大きく分けると、スリランカや東南アジアの上座仏教と東アジアの大乗仏教の二つの系統に分かれる。上座仏教は初期仏教の教義や実践に忠実な伝統派の仏教であるとされ、西暦紀元前3世紀ごろアショーカ王の時代にインドからスリランカに伝来した。現在の東南アジアの仏教の主流を形成する仏教は11世紀以降にスリランカから東南アジアに伝わり広まったもので、タイには13世紀ごろに伝来したとされる。このスリランカ系統の仏教は「長老の教え・ことば」(Theravāda)を継承してきたという意味で、上座(部)仏教あるいはテーラワ

ーダ仏教と呼ばれる。

いっぽうの大乗仏教とは西暦1世紀ごろのインドにおいて生じた仏教革新運動に起源を持ち、大胆な思想的展開を遂げた仏教である。その後大乗仏教はインドから中国へと伝わり、朝鮮半島を経て、日本に至る。大乗仏教は自らの仏教革新運動以前の仏教は「小乗」つまり「劣った小さい乗り物」と呼んだ。このなかにはスリランカや東南アジアの仏教も含まれるが、貶称・蔑称の意味合いが強いため、現在では上座(部)仏教と呼ぶのが一般的である。

また、タイにおいては出家生活を送る僧侶・見習い僧と在家信徒との間には戒律による明確な区別があるが、日本においては明治時代以降このような僧俗の区別が不分明になっている点や、タイには男子は一生に一度は出家して見習い僧あるいは僧となって一定の期間仏道修行をするべきであるとされる一時出家という慣習があり、男性の「成人儀礼」として機能しているなど、日タイの仏教を取り巻く社会的慣習の違いがある。

本稿では、上座仏教の柱の一つである仏教経典について、タイを中心とした東南アジアの言語との関係を簡単に紹介したい。

## 2. 上座仏教の経典と文字

大乗仏教の経典は、ブッダ直接の教えに加えその後の思想的展開を含んでおり、インドの古典語サンスクリット語の経典として編纂された。さらにチベットや中国に伝来した際には、これらの経典が翻訳や編集・編纂、ときには創作され、多数のチベット語や漢文の経典群を生み出していった。

いっぽう、上座仏教は仏滅後に仏弟子たちが集まってブッダの教えを確認する会議(結集)を経て編



\* Tadayoshi MURAKAMI

1966年生  
筑波大学大学院歴史・人類学研究科修士(1998年)  
現在、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 准教授 博士(文学)  
文化人類学、タイ地域研究  
TEL: 072-730-5276  
E-mail: mrkmthai@lang.osaka-u.ac.jp

<sup>1</sup> 227条の律を守る僧侶に対し、10条の戒のみ守る主として20歳未満の少年僧のこと。

纂された経典を継承しているとする。上座仏教の経典は、パーリ語という古代インド語によって記されており<sup>2</sup>、その原型は5世紀にスリランカで確立され、現在でもほぼこの原型を保存している。スリランカや東南アジアでは、このパーリ語経典を共有しているので、比較的良好似た仏教の実践形態を有しており、「上座仏教圏」といえる宗教圏を形成してきた。

カトリックのラテン語聖書やイスラム教のコーラン（クルアーン）のように翻訳されずに世界各地に広がっていったパーリ語経典であるが、ラテン文字やアラビア文字のような経典・聖典を表記する固有の文字を持たなかった。そのためパーリ語経典は、東南アジア地域の文字によって音写され、表記されるようになる。

東南アジアの中で最も早く上座仏教を受け入れたビルマ南部のモン王国ではモン文字パーリ語経典が作成され、後に上座仏教を受容したビルマ族王朝もこのモン文字パーリ語経典を採用している。いっぽう、タイ中部のシャム王国（現在のタイ王国の前身）は、古クメール文字を経典文字として採用し、タイ中部からタイ東北部にいたる地域では古クメール語文字パーリ語経典が20世紀の初頭まで使われてきた。またタイ北部の旧チェンマイ王国で使われていたパーリ語経典文字であるタム文字は、東南アジア大陸部のラオス、タイ北部、ミャンマー東北部、雲南省などのタイ系仏教徒によってパーリ語を記述する文字として広く用いられてきた。このようにモン文字、古クメール文字、タム文字は、東南アジアの上座仏教圏の伝統的な経典文字として広く流通してきた。

このような伝統的な経典文字に対して、19世紀以降には、各国語の文字で表記したパーリ語経典の編纂が始まる。古クメール文字パーリ語経典を伝統的に使用してきたタイ王国では、近代国家への改革を推進した国王ラーマ5世（在位1868-1910年）によって、1888年からタイ文字表記のパーリ語経典の編集作業が行われた。ほぼ同時期に、ラーマ5世はイギリスに本拠を置くインド学の研究所「パーリ文献協会」(Pali Text Society) によるパーリ語の翻訳やローマ字版編纂にも資金援助を行った。西洋諸国に向けてはパーリ語経典に基づく近代的な仏教研

究の推進を促し、タイ国内においては自前の文字（タイ文字）によるパーリ語経典を編纂することで、西洋諸国や近隣の東南アジアの国々に対して、仏教国タイの威信を高める努力を行った。初期仏教の時代から継承されてきたとされるパーリ語経典を自らの文字で記すという「文字へのこだわり」の現れであるといえる。

### 3. 「声」としての経典

東南アジアの仏教の歴史の中でパーリ語経典の数々の注釈や解説書、あるいはパーリ語による歴史書が作られてきたことを考えると、パーリ語の教育を受けた学僧の学識は非常に高く、経典の内容を把握し、東南アジアの諸言語に翻訳することはおそらく可能であっただろう。しかし、翻訳したものを経典としなかったのは、パーリ語という言葉の重要性、特にパーリ語経典の音声としての側面を重視していたと考えられる。一般の仏教徒にとって、僧侶とは第一にパーリ語の「経を誦める者」であり、ブッダ以来の戒律を遵守する僧侶によるパーリ語の誦経は「ブッダのことば」の現前であると理解されていた。これは先述したパーリ語経典をどの文字で表記するかという「文字へのこだわり」と対比をなす。

現在多くの研究者に共有されるパーリ語経典の概念は、近代ヨーロッパで確立した近代仏教学の研究成果によるところが大きい。近代仏教学は初期仏教の痕跡を残す貴重な言語資料として、パーリ語経典を研究してきた。そこで採用される文献学的手法では、「より古層」の、「より純粋な」仏教の教説の説明が目的とされ、経典が有するテキストとしての側面が強調されてきた。このような近代仏教学における「経典＝テキスト」観も一種の文字へのこだわりの表れといえよう。

しかし、広く上座仏教圏の仏教徒の実践に注目すると、分析対象として固定化されたテキストではなく、「読み上げる」、「書き写す」、「供える」、「崇める」、(詠唱されたものを)「聴く」といった人々の宗教実践の対象となる経典の姿が見えてくる。このような「宗教実践の中の経典」という観点から、近年の上座仏教の研究において、パーリ語経典の持つ意味を再考する研究が行われている。そこでは、書かれた文字ではなく口承を通して、座学ではなく身体行為を通して継承されるものとしての「経典」が再定義

<sup>2</sup> 上座仏教の伝統では、ブッダが活躍した当時のマガダ国の言語であるとされるが、近年では西インド系の言語に属し、古代マガダ国の言語ではないという説が有力である。

されている。このように再定義された「経典」とは、文献学的精査を経て確定されたテキストとしてのパーリ語聖典のみならず、仏教徒自身が「ブッダのこ

とば」として崇拜する幅広い言語資料を含むものであり、仏教経典を研究者の「机の上」から、人々の実践の中に置きなおす試みである。

